

心理学講座たより

「心理学講座」第14回配本附録

東京都神田局区内神保町2番24 電車通り 株式会社 中山書店

「心理学をやっている」というと、町内の人々が訪ねてきて、「ゆう靈」というものがほんとうにあるのでしょうか」と質問されるという話を学生時代にあります。先輩から聞かされたことがある。大正の末から昭和の初めのことである。明治末から大正の初めにかけては、催眠術とか透視、千里眼というようなものが、世の人々の注視を浴びて、心理学者の中でもこのようないい面に深い関心を寄せていた先輩の学者、たとえば、福来博士のような方がいた。

心理学に対する世の人々の関心の第二段階は、およそ心に関することなら、何でも心理学者に聞けばわかるだろうという考え方であろう。たとえば、産業に関する事でも、発達に関する事でも、社会に関する事でも、およそ心理という名のつくことであれば、心理学をやっているものなら何でも知っているように考えられるのである。十把一からげに心理学というものを考える、つまり心理学に対する未分化な認識である。



心理学の分化

山下俊郎

「心理学をやっている」というと、町内の人々が訪ねてきて、「ゆう靈」というものがほんとうにあるのでしょうか」と質問されるという話を学生時代にあります。先輩から聞かされたことがある。大正の末から昭和の初めのことである。明治末から大正の初めにかけては、催眠術とか透視、千里眼というようなものが、世の人々の注視を浴びて、心理学者の中でもこのようないい面に深い関心を寄せていた先輩の学者、たとえば、福来博士のような方がいた。

心理学に対する世の人々の関心の第二段階は、およそ心に関する事なら、何でも心理学者に聞けばわかるだろうという考え方であろう。たとえば、産業に関する事でも、発達に関する事でも、社会に関する事でも、およそ心理という名のつくこと

とは、一個人の力をもつてしては、とうていできないことになってくるのである。このことは、自然科学が分化していくと、すべての領域に通じるといふことは、一人の力をもつてしては、とうていできないことになってくるのである。このことは、自然科学のいろいろな部門を見るとはつきりする。

現在の心理学は、いままでいろいろの領域が分化しつつある時代にあるといつていい。近來の傾向として、いろいろの領域のハンドブック用の書物が作られているが、その一つ一つの領域においてさえも、おののの得意の方面を分担して執筆するといふ傾向が強いのは、このようなすう勢の現われであ

およそどの学問でもそうであるが、学問の未分化な時代には、まことに考へるようである。たとえば、大学の卒業論文などでも、古い時代の論文を見ると、まず「心理学とは何ぞや」という概論的な

る。自分の専門とする領域以外のことに関する話題としては、十全な叙述をすることが、なかなか難しいからである。この心理学講座にしてもそうである。心理学の包括する領域がひじょうに多岐にわたっているので、それぞれの領域のエキスパートが得意の分野を執筆することになったのである。

ちょうど医学に、外科学や内科学や小児科学その他いろいろの専門領域があるように、心理学も現在、分化の道をたどりつつある。心理学というものを勉強する最初に、心理学のいろいろの領域について一通り知識と見通しを得るということは、もちろん第一にしなければならないことである。しかし、あらゆる領域にことごとく通曉することは無理があり、また必要はない。第二段階は専門領域へ深くつ込んでいくことである。心理学自身の分化の度がだんだんすすめられていくば、世の中の人も、心理学者にそれぞれの専門領域にしたがって知識や技術を求めるようになるであろう。それはちょうど医学にそれぞれの極度に分化した領域において、その領域のことを世人が求めるという現在と同じことになるのだと思ふ。(東京都立大・東京家政大教授)

象印懇話会の病理解剖

恒村井

ヤスペースの哲学的な精神病理学総論を紹介された。西氏はそれぞれ、フロイドについて、ヤスペースについて、批判的な態度をくわざさずに話しをすすめられた。そのためでもあるか、ボレミークを期待して会がもよおされた。「フロイドとヤスペース」というテーマで、懸田教授がフロイドを、西丸教授がヤスペースを分担し、それにつづいて自由討論がおこなわれた。会場が階段教室であつたうえに、参会者も非常に多かつたので、学会のかたぐるしい形式がもちこされはしないかとあやぶまれたのであつたが、諭訪教授の司会が巧みだったので、懇談会はるい氣らくな雰囲気につづまれた会合であつた。

縣田教授は、フロイドの生いたちからはじめてその思想の発展する経路をたどり、十九世紀の思想的背景にまで言及し、西丸教授は、精神医学の精神病理学について懷疑的であったことも事実のようである。若い一、二の論者をのぞくと、討論に加つた論者の多くが私その一人だが——懷疑的な意見を述べていた。会が終つてから、昨年インタークを終えたばかりだという若い精神医学者が私の

この四月、名古屋でひらかれた、第五十一回日本精神々科学会がおわったその日の午後に、ここ数年来の恒例にしたがつて、精神病理学懇談会がもよおされた。「フロイドとヤスペース」のテーマで、懸田教授がフロイド批判は、書物や雑誌で紹介されているのであるから、こと

介された。西氏はそれぞれ、フロイドについて、ヤスペースについて、批判的な態度をくわざさずに話しをすすめられた。そのためでもあるか、ボレミークを期待して会がもよおされた。「フロイドとヤスペース」というテーマで、懸田教授がフロイドを、西丸教授がヤスペースを分担し、それにつづいて自由討論がおこなわれた。会場が階段教室であつたうえに、参会者も非常に多かつたので、学会のかたぐるしい形式がもちこされはしないかとあやぶまれたのであつたが、諭訪教授の司会が巧みだったので、懇談会はるい氣らくな雰囲気につづまれた会合であつた。

しかし、懇談会の雰囲気が、科学としての精神病理学について懷疑的であったことも事実のようである。若い一、二の論者をのぞくと、討論に加つた論者の多くが私その一人だが——懷疑的な意見を述べていた。会が終つてから、昨年インタークを終えたばかりだという若い精神医学者が私の

ところに相談に来て、今日の先輩たちの話
しで、精神病理学を専攻しようという志望
がぐらついてしまった。と話していた。

討論は、医者と患者の対人関係というむ
ずかしい問題にうつり、いきおい心理療法
(精神療法) のことにも触れ、心理療法で
治療をもたらす要因がいったいなんである
かといふ大事な問題になつた。時間がなか
つたので、論議というよりも印象談になつ
たのだが、やはり、なにが治療要因かわから
ないという懷疑的な述懐が、結論のよう
な形になつた。もっと時間があつたら、オ
ペレーショナルな考え方をすすめた意見も
でて、すこしは建設的な希望のもてる結論
をえられたのではないかと惜しまれる。

先日、卒業生謝恩会というのに初めて招
かれる光榮に浴した。広島大学心理学科の
新学士十数名、今年の背広の流行色は紺色
だという新調のダブルを既に一着に及んで
いる者も幾人かある。社会への門出をかざ
るつもりか、大いに張りこんで、われわれ
教師など滅多に近よれない広島市第一流の
谷間を通るのは、精神病理学を志望した者
の運命みたいなものであつて、若い志望者
にとどまらず、考えようによつては良い試煉
の機会になると思う。心理療法の治療機軸
に不明な点がたくさん残されているにして
も、おなじように、電気ショック療法やロ
ボトミーの治療機軸もわかってはいらないの
だから、そつ特別に立ちおくれているわけ
ではない。ただ、いつまでも懷疑論に低迷
しないためには、もうすこし、仮説の効用
というものを信頼してもよいのではないか
と思う。

(国立精神衛生研究所部長・医学博士)

心理学教師生活の一 年

兼子 宙

宇宙

ね」と、いつも人からいわれる。ところが私にとって、少くともこの一年間は、新しい生活空間をきずきあげ、これに適応する努力で夢中に過したといつてよいほどで、今までの生活とくらべて決して暇でものんきでもなかつた。ただ、何となく氣楽になつた気持のするこ^トが一つだけある。それは、これまでの組織全体としての仕事の責任や、組織内の人事への責任などの重圧から解放されて、自分一人の仕事の責任さえ考えればよいよう、自由な自己をとりもどした気分である。

私の経験では、もちろん人によって色々であろうが、わが国の善良なる職員關係では、一般にその責任は思つたより重いものである。それでも一向に恩師などという言葉も無いし、むじろ血も涙もないボスなどという攻撃の方が多い。これに較べると、教師と学生の関係は、私のようにのんきに感じたのでは罰があたるかもしれない。

「大学の先生は暇でのんきでいいでしょう」

今までずっと、心理学と関係のある仕事をして来たものの、いつも、需要者の立場で、心理学や心理学を学ぶ者への注文ばかり考えていました。どうも心理学の出身者は見識がせまい。社会的常識が足りない。サイトが不足したとか、大学で何を学んでくるのか、腕に何の技術もつけていない。もう少し、大学で何とかならないものだろうか、といった所見である。

ところが、今度は自分がその学生をあずかる側に立って見ると、これも相當に無理な注文だということがよくわかった。教師がこちらでいくらこうと思つても、向うが喰いついて来なければどうにもならない。一日八時間、週四四時間も結びついている職員の指導とは性質がちがう。おまけに、ご承知のように心理学というものが、無暗と間口の広い難学的なところのある學問であるために、これをイロハから大学後半の二年半ぐらいの間にやるということになると、勢いうわづらをなでるくらいのことに終つてしまふ。

この点について、この心理学講座は、一つの解決の途をあたえて呉れるかもしれない。心理学専攻の学生は、三年生になるく

らいまでの間に、この講座を全部自分で勉強してしまえ、ということにするのである。ただ、これはめい案であつて、どうしたら学生がそうするか私は知らない。職員だったら、三ヶ月くらいの期間でやらせられることだが。

何といつても、教師には暇がない。こうした学生の指導の面も本当は余り身が入らないのが実情だろう。一方には自分の勉強と大学としての研究という責任があるからだ。（もう一つ、喰わねばならない責任もある）

ところで、この大学の研究という責任も、これを満足に果すのには大きな困難があるようと思う。私も、大学に移るとき、こんどは又、研究が出来るぞと大いに期待したが、実際にになって見て、一向に出来ないことに面喰つてゐる。広島大学は、比較的に施設も人も条件はいい方であつてそなうなのだから、一般ではもつと困難が多いことだらう。

大学教授には暇が与えてある。図書費などもいくらかある筈だ。だから研究が出来ないなどいうのは怠慢の弁解に過ぎない。などと考へられてでもいるのだろうか。本

をかかえて研究室に坐つて居ればよいといふような、そんな中世紀的な研究方式が、近代科学の研究としては何の役にも立たないことを、大に社会に認識して貰うことが必要だと思う。

あれこれ考へあわせて見ると、大学の教師生活というものが、学生という相手も、学問という内容も、大きく変つてきているのに、大学は中世紀的伝統の中に睡つてゐるのではないかと疑つても見たくなるのである。もともと、植松正氏の忠言による「転職三年たたなければ、オリエンティーションも出来ないぞ」ということであるから、こうした所見を主張して見ようなどという気持は毛頭ない。ただ、満一年を記念してメモを残すだけの意図である。

（広島大学教授）

心理 学

〔五月 できる 新刊〕

小保内虎夫著

教育大教授
同助教授
講師
教育大教授
文学博士

A5判上製版二八〇円

入門 心理 実験 法

教育大教授 小保内虎夫
同助教授 小笠原慈瑛共著
辰野千尋著

A5判上製版二五〇円

編集部員だより

心理学講座が、昨年二月末に第一回の配本を始めてから、すでに一年を経過した。その間、毎月はとんど欠かさず配本し続けてきたことを思うと、編集部員として感無量のものがある。

ひとくちに毎月一回配本といつても、十人近くの先生のお原稿をのせていただくわけだから、なかなか大変である。責任編集者の先生と編集部員と著者の先生との三人が約束の日までにお原稿をくださらなかつたりして、その間に立つて編集部員がよわつたりすれば、もうおしまいである。たくさんの中の連絡がよくとれなかつたり、著者の先生が約束の日までにお原稿をくださらなかつたりして、その間に立つて編集部員がよわつたりすれば、もうおしまいである。

わめていられる責任編集者の先生がたが、一年以上にも及ぶ長期間にわたって、異常な熱意と努力とをこの講座にそがれたことが、スムーズに進歩した第一の要因である。

われわれ編集部員は、いつでもそういった先生がたの熱意に敬服し、激励され、緊張して仕事を進めることができたことを深く感謝している。

ところで、編集部員につきまとうさまざまな煩雑は、いすこも同じであろうが、とにかくに権威者の多いこの講座では、先生がたのお原稿をお約束の日までにいたすことが最大の仕事であった。そのため、多くの先生がたに大変なご無理をお願いしたり、思わずところに戦闘精神を發揮せざるをえなくなつたりして、失礼やらご迷惑をたくさんおかけいたしましたことを、この機会に深くおわび申し上げます。

しかし、執筆の先生がたが、ご多忙の中をとくに講座のために犠牲的精神を發揮して協力してくださつて、ほとんどお一人も欠けることがなくお原稿をお寄せくださつたことは、この講座がいかに祝福されて成長し続けたかを物語るものであろう。

このため、読者のかたがたに思わず負担をおかけすることになりましたことを、ここでおわび申し上げます。

また私達は、読者のかたがたから、いつもご親切な激励と、有益な批判とをいただきのが楽しみであった。編集部に寄せられた読者カードによつてみると、この講座が種々さまざまな職業のかたがたに広く読ま

れていることがわかつた。年令層からみてもいろいろで、あるカードには「五才」とあつたが、この年令の頃に私たちが何をしていたかをひそかに考へ、はずかしい思いをしたこともあつた。現代心理学がこのように広く社会一般の人びとに興味と関心をもたれていることは、心理学にとっても社会にとつても、まことに喜ばしいことである。

この講座も、皆様のご好意によりよいよ完成に近づいている。はじめ十二回配本の予定であったのが、執筆の先生がたの熱意が少しずつ積りつもつて、全体としてのご寄稿量が予定よりはるかに超過し、また巻によっては、わずかではあるが新項目が加わつたりしたため、できるだけ十三回配本におさめようとした私たちの努力にもかかわらず、ついに十五回配本に延び、別巻の総索引を最後に完成する運びになつてしまつた。

『そのため、読者のかたがたに思わず負担をおかけすることになりましたことを、ここでおわび申し上げます』

完成を間近にひかえ、有終の美を飾るべく、いつそその努力をいたしたいと思います。(日本応用心理学学会「心理学講座」編集部)

読者のページ

生理学講座と共に非常に役立つ。心理学上の問題が起った場合に本講座の中で、それに相当する項目が挿せるのは嬉しい。また、領域が広く、内容は高度である。あらゆる学問の領域において、こんな講座が出ると実際に有難いのだが、自分としては、こんな形の社会学講座がまず出ることを切望する。

福岡県八幡市東台良町 教員 亀井秀沈

心理学が哲学などとならんで、人間と社会を知る上での科学だ、という感を貴社の「心理学講座」の中で得ました。

会員 鈴木富次

学生時代に入門程度のものしか触れていたのですが、われわれ相互の間に内なる複雑な人間関係で、科学的に分析して行くための指標とすることが可能のようになります。特に貴講座の内容が、難解な専門的事例に終始することなく、応用心理学という見地から、広く社会心理の問題

にまで及んでいるのは結構なものと思つていただけたよう希望します。

東京都練馬区南町 会員 島崎多兵衛

嬉しく拝見しました。グラフを多く用いられていて、理解を助けてくれたように思ひます。(一信) 非常にわかり易く嬉しかったので、高校三年の部で教材の参考資料として、生徒に紹介させていただきました。(二信) 西親が一心に拝見していました。(三信) て、なかなかよいことがあげられているとよろこんでいました。(三信)

大阪市東成区大今里町 教員 山田満子

謹 告

シナップス機構	教育大教授 杉 靖三郎
脳の形態と機能	東大教授医学 内村 祐之
行動の個体発生	東大講師博士 白木 博次
情意実験法	教育大助教授丘 直通
情緒感情論	東北大教授 大脇 義一
行動の系統発生	京大教授園原 太郎
動物	教育大助教授丘 直通
人間	東大講師博士 阿部孫四郎
社会心理学の動向	東京工大教授宮城 音彌
社会心理学の領域同	東京工大教授宮城 音彌
社会心理学の動向	一橋大助教授 南 徹
パーソナリティ(1)	日大 教授 渡辺 徹
パーソナリティ(2)	教育大助教授長島 貞夫
(3)	(3) 東京工大教授宮城 音彌
経済学と心理学	東大心理学研究室村瀬 孝雄
経済学と心理学	経済学博士高垣寅次郎

心理学講座

第十五回配本内容

音 研究室

音 研究室